

一般社団法人 日本学校教育相談学会

The Japanese Association of School Counseling and Guidance

会報 JASCG

- 1◎巻頭言
- 2◎第35回中央研修会のご案内
- 3◎第36回総会・研究大会（愛知大会）報告//
◎新入会員紹介—奈良県支部—
- 4◎スクールカウンセラー情報
- 5◎支部のキラリ
- 6◎—支部活動報告—【広島県支部】//研修委員会
- 7◎調査研究委員会//認定委員会//学会誌作成委員会
- 8◎広報委員会//ガイダンスカウンセラー関連情報
- 9◎会員の著書紹介//会長コーナー
- 10◎事務局より//編集後記

第75号

巻頭言 私と教育相談 「未来につなげる」



副会長
小玉 有子

1月1日に起きた能登半島地震をはじめ、今年には全国各地で大きな地震が発生し、さらに猛暑・台風・大雨と、被害に遭われた方もたくさんいらっしゃると思います。心からお見舞い申し上げます。

私は、2011年東日本大震災の後、ご縁があって石巻市・米沢市の教員研修に、数年間携わらせていただきました。子供たちのために、教員ができること、私ができることは何なのかと自問自答しながら、時には無力感に落ち込みながら、それでも、教育相談は、必ず「先生方や子供たちの助けになる」と信

じて、先生方の頑張りを応援してきました。すぐに結果がでなくても、先生方の頑張りは、子供たち一人ひとりの発達を支えたと信じています。

子供たちは、高等学校卒業後も、70年余の人生を生きることになります。今問題がなければいいのではなく、長い人生を幸せに過ごすためには、自尊心を育て、コミュニケーションスキルや情動スキル、ライフデザインを描き修正する力、レジリエンス等、様々な力を身につけていかなければならないと考えます。私たちが、子供たちと関わる時間には限りがありますが、だからこそ未来を見据えて、人生を生き抜くための力を身につけるお手伝いを、今からできたらと思います。

長い人生、いつも順風満帆とはいきません。挫折を経験したり、災害に遭遇したり、大切なものを失ったり、絶望することもあるでしょう。それでも、そこからもう一度、自分の人生を立て直せるような大人になってほしいと願います。

「教育相談は、学校で子供たち一人一人が自分らしく輝けるための支援だ」と考えていましたが、たくさんの教え子のその後の人生に接し、「子供たちが、幸せな一生をおくるために、教育相談は子供の発達を支援できる」と思えるようになりました。今の学校生活を大切にしながら、未来の自分も大切にできる子供たちを、育てられたら嬉しいと思います。

私が教育相談を学び始めたころは、不登校はまだ登校拒否といわれ、はじめていじめによる自殺者が

でたと、連日テレビのワイドショーが取り上げていました。教育相談は問題行動の予防と早期対応が使命だと言われる一方で、管理職や生徒指導関係者には、子どもを甘やかしていると批判もされました。転勤するたびに教育相談の必要性を訴え、校務分掌に教育相談部を作って欲しいと孤軍奮闘したのも、懐かしい思い出です。当時の私の思いが、月間学校教育相談 1998 年 1 月号の学校教育相談-私の 200 字定義という原稿に残っていました。「子どもたち一人ひとりがいきいきと活動し、自分らしさを発揮できるように支援する。子どもたちが抱えている問題や発達課題にも目を向け、個々に合った支援・援助を行うとともに、学校という環境を整備する。

(一部略) 問題があるから教育相談が必要なのではなく、学校生活の基盤に、教育相談は当たり前のようにあるべきだと、今も同じように考えています。

今まで様々な困難がありました。私には、全国に、学会でつながったたくさんの仲間がいて、すばらしいサポートに支えられて乗り越えてきました。私も、若い先生方の、良き理解者・サポーターでありたいと思います。

★第 35 回中央研修会のご案内

第 35 回中央研修会を令和 7 (2025 年) 年 1 月 26 日 (日) に Zoom によるオンラインで開催いたします。

今回の中央研修会は、昨年度と同様の枠組みで行います。午前「コース別講座」として 4 講座を開設いたします。午後は「パネルディスカッション」を行います。その後、オンラインでの交流会を企画しております。

今年度は、統一テーマとして、「多様性」を設定しました。コース別講座についても、多様性についてさまざまな角度から学べる機会といたしました。

内容については以下の通りです。

【コース別講座】(9:30~12:30)

<Aコース> ニューロダイバーシティの視点で考える子どもたちの「学びの多様性」

講師：村中直人氏 (一般社団法人子ども・青少年育成支援協会代表理事)

<Bコース> 性的マイノリティーの理解と支援

講師：葛西真記子氏 (鳴門教育大学教授)

<Cコース> 特異な才能のある児童生徒に対する理解と支援

講師：松村暢隆氏 (関西大学名誉教授)

<Dコース> 外国にルーツを持つ子どもの理解と支援

講師：李原翔氏

(神奈川県立地球市民かながわプラザ相談員)

【パネルディスカッション】(13:30~16:30)

<テーマ> 「誰一人取り残さない」教育

—インクルージョン型実践の可能性と課題—

<趣旨>

インクルージョンの考え方は浸透してきていますが、多様な子どもたち同士が同じ空間を共有するというだけでは不十分です。子どもたち一人ひとりの能力が発揮され、安心感があり、子ども同士の相互作用の中で「誰一人取り残さない」教育が実現される教室をめざすためには、どのようにしていけばよいのでしょうか。

そのような問題意識から、3 名の話題提供者にご登壇いただきます。この多様な 3 人の語りが生み出す化学反応から、「誰一人取り残さない」教育のためのできることを考えていきたいと思ひます。

<司会・指定討論>

・和井田節子氏 (NPO 法人子ども支援地域プラットフォーム代表)

<パネリスト>

・三谷幹氏 (名古屋市小学校教諭) :

担任が行う多様な子どもたちへの支援

・高橋由衣氏 (公益財団法人スペシャルオリンピックス日本職員) : スペシャルオリンピックス日本での実践とスウェーデン小中学校における多様性への支援

・副島賢和氏 (昭和大学准教授) :

病いによる傷つきを抱えた子どもたちの回復・成長に必要なかわり

【オンライン交流会】(17:00~18:00)

オンラインでの交流会において、1 日の学びを振り返るとともに、お互いの実践を語り合い、交流を深めていただく時間といたします。

会員の皆様のご参加をお待ち申し上げますとともに、同僚やお仲間にもお勧めいただくことを期待しています。

(文責：研修委員長 会沢 信彦)

★第36回総会・研究大会 (愛知大会)の報告

令和6年8月3日(土)、4日(日)、愛知県の刈谷市総合文化センターにおいて、第36回総会・研究大会を開催しました。「学校教育相談はどこへいくのか—アフターコロナと生徒指導提要改訂—」をテーマとし、全国の会員のみなさんと、対面で、膝つき合わせて議論することができました。

当日は約250名の参加者があり、約40本の実践事例・研究発表や自主シンポジウムが揃いました。そこかしこに、大会テーマに込めた私たちの想いが詰まった大会になったと感じています。

実践事例では、みなさんの地道な努力の積み重ねを垣間見ることができました。コロナ禍における相談活動のもどかしさ、アフターコロナにおける社会と学校の変容。それらに対する、目立たないけれども分厚い実践がいくつも発表されていました。また、研究発表には、アカデミックな内容のものが数多く集まりました。本大会では、発表の座長をすべて愛知支部から出しました。経験豊富な支部理事を中心に担当しましたが、研究の高度さについて行くのが精一杯なものでありました。

これらに加え自主シンポジウム、そして本部企画シンポジウム「学校教育相談—今までとこれからを考える—」や愛知支部企画シンポジウム「不登校の近況と支援を考える—生徒指導提要を踏まえて—」など、多彩なコンテンツが揃いました。発表、企画して下さったみなさんに心から感謝しています。

また、記念講演講師の名古屋大学大学院教授中谷素之先生も、大会テーマに賛同くださり、「教室はなぜ『対面』なのか?—学校だからできる、これからの学習指導・やる気支援のために—」という演題でご講演くださいました。学校教育の根幹であると誰もが認める「学習」と、我々が大切に日々積み上げてきた「教育相談」の営みが、互いに深く結びついて存在するのではないかという示唆に満ちたお話を伺うことができました。考えさせられることがとても多い講演だったと感じています。

さて、愛知支部では、60人近いメンバーで実行委員会を組み、大会運営に当たりました。2年間にわたる実行委員会の道のりは、長かったようでもあり、あつという間だったようでもあります。

運営に当たって、愛知支部のモットーは「仲良く、

協力して、できる範囲」でした。「学び続ける教師」と「教師の多忙化解消」という、一見相入れない課題が突きつけられている教育現場で、教師の学びの在り方は、「自ら参加したくなるようなものであること」と「持続可能なものであること」の両立こそが最重要であるように思います。教育相談においても同様です。「困っている児童生徒のためになにかできることはないか」という教師としてごく自然で必須の想いを形に変えるべく、手弁当で本学会を立ち上げ、学び続けてきた諸先輩方の衣鉢を継ぎつつ、同時に、教師を続けることに不安を感じている同僚、教師になることそのものをためらう若い人たちにも、しっかりとした答えを提示する必要があると、大会運営を通じて改めて感じさせられました。これからもこの大会が、学会本部と主管支部の「できる範囲」で、意義深いものであり続けることを祈ります。

来年は、春日井会長のお膝元「京都」での開催です。どのような大会になるのか楽しみにしつつ、京都支部のみなさんにバトンを渡します。「そうだ。来年は京都に行こう！」

(文責：愛知大会実行委員長 松原 正明)

★新入会員紹介—奈良県支部—

学校現場に置籍のまま大学院で臨床心理学を学び、修了後の現在は教育委員会で教育相談業務に携わっており、常にクライアントに寄り添う姿勢を忘れない眞井菜央子先生を紹介します。

以下、本人からの一言です。

私は小学校教員をする中で、目の前の子ども達を理解し支援することへの限界、自身の未熟さを感じ、研修員制度を利用し大学院へ進みました。修士論文作成に向けて、多くの論文を読みあさっていると、執筆者の中で聞き覚えのある名前を見つけました。自分が小学校時代にお世話になった山本健治先生でした。恩師が、同じ分野の研究の先駆者であることを知り、先生にお手紙を書きました。数十年ぶりに再会し、日本学校教育相談学会のことを教えていただき、入会させていただくことにしました。臨床心理学を学び、教員と心理士の二つのアイデンティティをどのように両立させていくのか、擦り合わせていくのか、はたまたどちらかに絞っていくのか、自分の中にとまどいや迷いがあったのですが、山本先生は必ず自分の中で統合していけるとご助言くださいました。学会での活動を行う

中で、その答えが「学校教育相談」にあると感じています。子ども達を支援するすべての人が、教育相談を軸に関わっていけるよう、教員の経験と臨床心理学の学びを生かし、これからも学会での活動に邁進して参りたいと思います。(奈良県支部 真井菜央)

(文責：奈良県支部理事長 山本 健治)

★スクールカウンセラー情報

「スクールカウンセラーの理想」

栃木県支部 原田 浩司

相談室



スクールカウンセラーになって11年目を迎えました。

日本でスクールカウンセラー(以下SC)が導入される前か

ら、私は「アメリカのSC制度」に関心があり、25年前にサンフランシスコの学校での様子を見に行きました。そこで驚いたことは500人規模の学校で、常勤のSCがいたことです。SCは、カウンセリングの他にクラスに入ってSSTなど対人関係の授業を担当していました。アメリカでは教師とカウンセラーの資格を持っている専門家がSCです。そして、日本でいう校内委員会や個別の指導計画作成も担当していました。常勤ですから相談したい時にいつでも相談できることは大変重要です。また、心理面だけでなく教育面の専門性があるので、進路相談や学習支援策も提案できます。そこが、非常に重要なポイントです。日本にSC制度を導入する時、心理面に偏っていたために、カウンセリングはできても、学習面からのアプローチが不足していました。日本では、教育相談は教師が担当してきたという歴史があったために、SCは心理の専門家というイメージが今だに拭えないのだと思います。最近になってガイダンスカウンセラーがSCに採用されたことは大変良いことです。

ここからは、私がSCで経験していることや考えていることをお話します。私は学校教育相談を40年前から教員として学んで学校カウンセラーSVの資格を取り、さらに、学校心理士やSENS-SV(特別支援教育士SV)の資格も取って、学校での教育相談活動に活かしてきました。その後、校長を経て宇都宮大学教職大学院で勤務すると同時に、栃木県のSCになりました。そこで感じている

ことは、教員としての学習指導や生徒指導・教育相談を経験したことが、大変活かされているということです。SCとして一番多い仕事は、不登校や発達障害の生徒と保護者面談ですが、それと同じくらい重視していることは、担任へのコンサルテーションです。日本の担任の仕事は重労働で、授業の他に学級経営や校務分掌、中学校では部活動・進路相談、さらには子ども同士のトラブルや保護者からのクレーム処理などがあります。教師自身がメンタルヘルスを維持することは極めて重要です。しかし、35人学級の一人一人の多様なニーズに応じることは困難です。特に、不登校が増加している今日、クラスに数人の長欠児の子どもの対応を担任一人でするはずもありません。そんな時、SCが客観的な立場で寄り添って話を聞くことは大きな意味があります。また、不登校や不登校の背景に発達障害が関係していることはSCの中では自明のことです。

2007年に始まった特別支援教育により、ADHD・ASD・LDの認知度が高まり、SCに対してもアセスメントを求めるケースが増えています。幸い、発達障害を専門に研究と実践をしてきたことが、SCの仕事にも大いに役立っています。

WISC-V検査だけでなくLD検査希望も増えています。SCとしてカウンセリングだけでなく、授業参観をして生徒の適応状態を見取り、エビデンスに基づいたアセスメントを組み合わせることで、不登校や学習不振、対人関係の苦手さの背景に何かあるのかも理解できるようになります。

最近よくある中学校の事例として、小学校の時は問題行動がない真面目な子が、中学生になると「学習の遅れ」や「コミュニケーションの脆弱さ」などで自信を失い、行き渋りから「不登校」になるケースです。WISC-V検査とLD検査を実施してみると、「知的ボーダー」で「学習障害」のため、学校生活に自信を失っていました。「学習障害」の早期発見は不登校予防のための喫緊の課題です。

これからは、不登校になる前の小さな変化をとらえ、早期支援ができる学校体制が求められます。そのためにSCとして生徒・保護者だけでなく、教員や学校全体をサポートしていきたいと考えています。

(担当：鈴木 由美子)

☆支部のキラリ!☆

「キラキラ教育相談」

東京都支部 遠山和彦



I. 主題設定の趣旨

学校教育相談学会のキラリシリーズより、キラリと言う表現は、キラキラと光輝くきらめく様子を意味している。

そして、生き生きとした若さに輝いているように感じられる。

キラキラした状態像は、人間関係作りをするための必要条件である。

II. 学校教育相談に対する考え方

1. 人間尊重の哲学である。
2. 自己実現を目指す適応条件を設定する。
3. 不適応を起している原因を取り除く。
4. 自己啓発に基づいた感性による援助支援のスキルを成立する。

5. 4つの条件

- | | |
|-----------|-----------|
| (1) 時間の制限 | (2) 責任の制限 |
| (3) 愛情の制限 | (4) 行為の制限 |

III. 教育相談研修をするきっかけ

1. 勤務先の中学校に於いて、生活指導の担当教師をしていたときに、3年生の代表が、“自分達の話聞いて欲しい”と行って来たので対応したところ、次のような内容であった。

「先生は授業のときは、笑顔で冗談を言ったり、親しみを感じたりして授業が楽しかった。しかし、生活指導の先生として注意するときは笑顔が見られず、“またお説教か”としか思わなかった。」と話をした。

2. 生徒の言葉の内容をきっかけとして、カウンセリングマインドの研修を行った。

例・直そうとするな、分かろうとせよ。

- ・ことは尻をとらえるな、感情をつかめ。

- ・人の振り見て我が振りなおせ。

3. 言葉で理解しても現実場面でどのように行動するか、ロールプレイングの研修を行った。

IV. 実践するための教育相談の3つの手順

1. 人間関係作り
 - ・相互理解をするための必要条件。
2. 問題の核心をつかむ
 - ・基本スキルの必要性。
例～受容、繰り返し、明確化、支持、質問
3. 適切な処置をとる
 - ・自己実現を目指す条件を考える。

V. 実践的対応の方法

1. 教育相談的対応
相手の特性を理解していこうとするもの。
2. 教育的対応
教え諭して、気付かせようとするもの。
3. 問題解決的対応問題
問題の根っこにあるものを取り除こうとするもの。この場合は、相互納得なので謝罪が必要。

VI. 参考にした古典文学

1. ・古今和歌集 ・今昔物語
 ・平家物語 ・徒然草
2. 上記の文学には共通した文章や歌集が見られるが、いずれも“キラキラ”という表現である。

例としてケラケラ（キラキラ）と笑いながら、笑顔で話しかける様子がうかがえる。そこに古代社会の生き生きとした輝きがある。

遠山和彦氏は、ロマンスグレーの紳士です。90歳を過ぎても、探究心は衰えず論文を書いたり講演会を行ったりしています。また、古典にも造詣が深く、「キラリ」は「キラキラ」から来ていて、平家物語などに出てくるそうです。ご自身も「キラリ」と光っています。
(担当：小川 正人)



★一支部活動報告—【広島県支部】

広島支部は、現在会員数が28名で、通常は「広島子どものこころ支援ネットワーク」という名称で活動しています。

活動は年に6回、奇数月のどこかの土曜日の午後開催しています。基本は対面での研修ですが、コロナ以降は、可能な限りオンラインでの参加もできるようにしているので、日本各地から参加者が集まり、少ない時で30名、多い時では70名程度の参加者となっています。昨年1年間の延べ参加者は290名ほどで、1回あたり50人弱となっています。

集まっているのは、研究者、現場の先生、大学生、福祉や医療関係の従事者と多岐にわたっていて、みんなでディスカッションをしたり、終わった後に懇親会をしたりすることで親睦を深めています。年齢的にはかなり若い層が多く、20代30代の学生や若手の教員が頑張っています。

この1年間の研修テーマは、2023年5月：「どう進める？これからの生徒指導」、7月：「UDLをブラッシュアップ」、9月：「どうする？若手や同僚へのサポートとコンサルテーション」、11月：「学びのユニバーサルデザイン(UDL)-マインドセット、転換・実践・伴走を知る1日」、2024年1月：「家族と学校から考える愛着の育ちと、その支援メンバーの実践に学ぶ会」、3月：「4月から生かせる生徒指導・教育相談実践ワークショップ」、でした。今年度も5月7月と学びを続けています。大学に籍を置く者も多いため、そうしたメンバーが講師をすることも多いのですが、毎回のテーマについて実践発表を組み込んで、みんなでディスカッションをしたり、実践的なワークショップをしたりすることを大切にしています。

課題は会員の少なさです。少しずつ伸びてはいますが、参加人数に比べると、会員数は約半分、そこが残念なところです。自分のために学ぶことも大事ですが、教育相談が発展していくためには、日本の子どもたちのために自分たちが何ができるかという視点で主体的に動く教師が必要だと思っています。今後はそうした意識を持ち、全国につながろうとする会員が増えていくように、様々な場面でそうした問題意識や必要性の認識が持てるように動いて

いきたいと思っています。

それから先述の通り、広島支部の活動はOnlineでも配信していますので、日本中どこからでも参加可能です。HPも広島子どものこころ支援ネットワークと検索してもらえれば、研修会情報なども掲載されていますので、是非チェックしてみてください。

また、2026年度には全国大会を広島で行うことになっています。趣向を凝らして良い大会にしたいと考えています。多くの方々の参加をお待ちしております。

(文責 広島県支部理事長 栗原 慎二)

★研修委員会

8月10日(土)にZoomによるオンラインで第25回夏季ワークショップを開催いたしました。参加者は178名を数え盛況でした。

アンケート結果から、参加者の感想を紹介します。

<Aコース>

生きる教育の実践の現状と成果が分かり、夏休み明けから、自身の実践の方向性が見えました。

<Bコース>

発達障害について基礎的な知識をおさえた上で、学生の実態について知ることができて参考になりました。

<Cコース>

学力向上の視点でなく、心理的支援の視点からICT活用について学ぶことができてよかったです。

<Dコース>

“現象学的アプローチ”というこれまで知識になかった教育相談の考え方を学ぶことができました。

<Eコース>

フォーカシングについての講義を聞き、さらに体験する機会があったことで、さらに学んでみたい意欲が湧いています。

<Fコース>

論文作成に挑戦しようと思い、本コースを受講しました。アウトライン作成が特に大切なことがわかりました。

(文責：研修委員長 会沢 信彦)

★調査研究委員会

8月3、4日に行われた愛知大会において、「学校の教育相談体制の充実をめざして—教育相談コーディネーターの役割、教員に求められる教育相談の力—」をテーマに自主シンポジウムを行い、これまでの調査から明らかになってきた点をご報告させていただきました。委員を代表して、住谷委員、松井委員、和久田委員から、①教育相談コーディネーター経験者へのインタビューから見えてきた学校において教育相談が機能することを促進・阻害する要因、②同じくインタビューから見えてきた教育相談コーディネーターが大事にしている姿勢や関わり、教育相談コーディネーターが生み出す学校風土、③自由記述式の質問紙調査から見えてきた教員に求められる教育相談の5つの力について、話題提供がありました。指定討論の西山久子先生からは、教育相談コーディネーターが寄与する学校風土づくり、コーディネーターに共通する人間性、教員に求められる最も重要な教育相談の力についてご質問をいただきました。その後、ご参加いただいたフロアの先生方からも、発表内容へのご意見、それぞれの地域や学校の教育相談の体制、教育相談コーディネーターとしての活動の様子などについて伺うことができました。自主シンポジウムを通じて、今後への貴重なご示唆をいただきました。ありがとうございました。さらに分析を深め、調査結果をまとめていきたいと思います。

(文責：調査研究委員長 金子恵美子)

★認定委員会

○第3回学校カウンセラー事例研究会・情報交換会の開催及び事例募集について

令和4年度、5年度に学校カウンセラーを取得された皆様を対象に、令和6年11月23日(土)10:00~12:00 オンラインにて、学校カウンセラー事例研究会・情報交換会を開催します。事例研究会の事例は参加者の皆様から募っています。様式は問いませんので日頃の実践をA4用紙1~2枚にまとめ事前に提出をお願いします。多様な見方・考え方・対応の具体策などをお互いに学び合ひましょう。参加及び事例提供をお待ちしております。

○今年度の学校カウンセラー資格更新対象者について

今年度の更新対象者は登録証明書(カード)有効期限2024年3月31日の皆様です。既に対象の皆様には、今年度からの新しい様式の書類を郵送させていただいております通り、更新に必要なポイント数が緩和され更新しやすくなりました。どうぞ奮って更新申請をお願いします。**締切は12月20日(金)**です。

今年度末日迄に70歳以上、更新回数2回以上の皆様のポイント報告(様式2)は不要ですが、申請書(様式1)提出と更新審査料振込は必要ですのでお忘れのないようお願いします。

○学校カウンセラースーパーバイザー資格更新の要項・申請書類について

学校カウンセラースーパーバイザー資格を令和元年度に1回目の更新をされた皆様、令和2年度に新規取得された皆様は、来年度がそれぞれ2回目、1回目の更新年度になります。**学校カウンセラースーパーバイザー資格更新申請要項及び申請書類を学会ホームページに11月初旬を目処に掲載します**ので、ご覧の上ご準備をお願いします。

(文責：認定委員長 築瀬 のり子)

★学会誌作成委員会



学会誌作成委員会は学会誌第35号の刊行に向けて活動しています。『学校教育相談研究』への投稿締め切りは8月末日ですが、8月に開催された愛知大会発表者は10月末日となります。多くの投稿をお待ちしています。

学会誌に投稿された論文は、令和2年度に改訂された審査方法により、学会誌作成委員会委員及び協力委員の複数により論文審査されます。その結果が「掲載する」の場合は当該年度の本誌に掲載します。「修正の上掲載する」の場合は、修正終了後、直近の本紙に掲載します。審査結果が「修正の上再審査する」の場合は、委員会の意見を基に修正し、委員会の指定する期限内の再投稿を求め、再審査となります。その結果が「掲載する」「修正の上掲載する」は、上記同様の扱いとなります。

再審査の結果が「修正の上再々審査する」の場合は、委員会の意見を基に修正し、委員会の指定する期限内の再々投稿を求め、委員の再々審査を行います。

す。再々審査の結果が「修正の上新規投稿として審査する」の場合、修正した原稿の投稿を可能としますが、新規同様の審査となります。

論文作成の指導を十分に受けていないか投稿を検討されている会員の方は、「論文作成連続講座」に参加することが、論文作成の一助になるかもしれません。本年度のご案内は、令和6年10月下旬に掲載します。

(文責：学会誌作成委員長 中村 豊)

★広報委員会

前号の内容と重複しますが、会報第73号から「会員の著書紹介」のコーナーがスタートしました。このコーナーは、皆様の推薦（自薦も可）があってのものです。引き続き、会員の教育相談実践等に有益となる書籍がありましたら、新刊や単著に限らず、推薦をお願いします。広報委員長の松本直美 (m.fam@d8.dion.ne.jp) まで、まずはご連絡ください。記事は、推薦者に書いていただきますので、よろしくをお願いします。

そして、広報委員会が担当し、学会のSNS活用に向けた準備が本格化しました。ツールは、XとFacebook、Instagramを想定しており、令和7年春頃の運用開始を目指しています。支部やブロックの研修会等の開催情報を広める手段としても活用していただけたらと考えています。準備の詰めに際して、効果的な活用の仕方、扱ってほしい内容、更新のための方法などについて、会員や支部のニーズ、要望などをできるだけ把握したいと考えています。

10月のオンラインによる支部事務局長会でも、ご意見を伺いました。会員として、ニーズや要望などのご意見がある場合は、上記の広報委員長（松本直美）のアドレスまで、メールでお寄せください。準備や運用開始に間に合わせるため、できるだけ早くお願いします。

(文責：広報委員長 松本 直美)



★ガイダンスカウンセラー関連情報

第2回理事会（6月21日）の1部抜粋です。

＜渉外委員会報告＞

東事務局長より、スクールカウンセラー活用事業に関する修士相当資格の件で、柴山昌彦衆議院議員、及び増井秘書と相談したことが報告された。

＜プログラム運営委員会報告＞

新井邦二郎プログラム運営委員長より、現在61講座中10講座が完成していることが報告された。またプログラム運営委員会は、柴山議員からの報告を受けてから、再開する見通しであることが報告された。

＜現職の教員に対する心理の専門性を高める研修プログラム報告＞

石隈利紀チームリーダーより、文科省より委託事業の正式な採択通知があったことと、その経過状況が報告された。

＜ガイダンスカウンセラー資格更新申請書類送付のお知らせ＞

本年度の資格更新対象者である、2014年度認定の方（認定番号が14で始まる方）に、7月上旬に資格更新に関する書類を郵送しました。10月1日（火）～12月4日（水）の受付期間〔更新申請書はHPからも取得できます〕

<http://jsca.guide/qualification/certificated.html>

＜ガイダンスカウンセラー資格認定試験のお知らせ＞

今年度のガイダンスカウンセラー資格認定試験の申請書を公開しています。

お知り合いの方にご紹介いただけますと幸いです。

<http://jsca.guide/qualification/public.html>

※メールアドレスの変更などは、下記までご連絡ください。

一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会事務局

e-mail : info@jsca.guide

T E L : 03-3941-8049

ホームページ : <http://jsca.guide>

(文責：一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会理事 学校カウンセラー・ガイダンスカウンセラー 加勇田 修士)

★会員の著書紹介

『どの学級でも盛り上がる！鬼ごっこ&じゃんけんの魔法』

栃木県支部理事の伊澤孝先生（現在は壬生町立壬生小学校教諭）は、グループカウンセリングのツールの1つである「対人関係ゲーム（SIG）」の有数の実践者で、研修会の講師も多数されています。その伊澤先生が、2020年4月から2022年3月までの2年間、月刊学校教育相談に連載された内容を再編集して、『どの学級でも盛り上がる！鬼ごっこ&じゃんけんの魔法』（ほんの森出版 1,700円＋税）を出版されました。

「対人関係ゲーム」の中でも、子どもから大人まで、簡単にできて楽しい「鬼ごっこ」と「じゃんけん」に絞って、その遊び方やルール、カウンセリングの視点、活用事例などを紹介しています。小中学校の学級の仲間づくりはもちろん、高校・大学・大人のコミュニティの関係づけや関係づくりにも活用できます。ちょっとした隙間の時間に使え、みんなで一緒にたっぷり活動できる時間でも扱えます。子ども同士だけではなく、教師と児童生徒の関係づくりにも有効で、簡単なソーシャルスキルの獲得も促すことができ、学級経営やホームルーム経営を充実させる引き出しの1つになります。学生や社会人の適応を促すワークとしても役立ちます。



（文責：栃木県支部理事 松本 直美）

★会長コーナー



8月3日～4日と第36回研究大会（愛知大会）が刈谷市で開催されました。実践事例・研究発表は29本、本部企画シンポジウム、現地企画シンポジウム、自主シンポジウムは計9本にのぼり、大盛会となりました。参加者は、248名と現地から報告を受けました。また、現地のスタッフが73名と伺い、愛知県支部の底力のすごさを実感しました。松原正明実行委員長を初めとする愛知支部のみなさま方には、心より感謝申し上げます。

なお、次年度の研究大会は、2025年8月9日（土）～10日（日）に京都で開催されます。夏季ワークショップの同時開催については、会場の都合などもあり、京都府支部と調整中です。また、総会については、研究大会とは別日にオンラインで開催していくことが、会長副会長の議を経て、過日の新役員会で決定されました。これによって、全体会の記念講演を受けて、現地や本部などのシンポジウムを企画するといったことも可能になりました。ご期待ください。

今年度の総会では、この間の各支部の取り組みによって、会員減に一定の歯止めがかかり、増加傾向にあるとの報告もなされました。教育相談は、教職員が個々の子どもと同時に、様々な子ども集団に対して、その成長、発達を支援していく営みです。現職の先生方は教育相談コーディネーターとして、退職された先生方はスクールカウンセラーとして、役割への期待は高まっています。引き続き、よろしくお願いたします。

（文責：会長 春日井 敏之）



★事務局より



令和6年6月22(土)の全国役員会(社員総会)、7月20日(土)の支部代表者会、8月3日(土)の総会にて、令和5年度の事業報告・令和6年度の事業計画等が承認されました。

新入会員増加対策や会員要望対応を継続して取り組むこと、メルマガ配信の拡大等の本部事務局の取組についても承認されました。

また新ブロック代表(全国理事)として、以下の皆様が承認されました。

- ・北海道・東北ブロック 吉田 祐子(山形県)
- ・北関東・山梨ブロック 住谷 孝明(群馬県)
- ・南関東・新潟ブロック 山本 浩之(川崎市)
- ・東海ブロック 平林 克友(岐阜県)
- ・近畿・石川ブロック 山本 健治(奈良県)
- ・中国・四国ブロック 淀瀬 由美(鳥取県)
- ・九州・沖縄ブロック 成住きよみ(北九州市)

ブロック代表は、全国災害対策委員会と役員等推薦委員会の委員も兼ねることになります。

(文責：事務局長 木村 正男)

★編集後記

8月の総会・研究大会を経て、令和6年度が動き出しました。本号からもその鼓動を感じることができます。本部のさまざまな改革や支部の努力もあり、会員の減少傾向の流れが止まりました。入会や学校カウンセラー認定・更新のハードルが見直され、研修や調査研究、学会誌作成も改善が進み、一段と充実しており、会員増の流れに転換していくことが望まれます。そして、SNS活用によって、新たに学会に関わる人々が生まれ、会員の利便性が高まることを願っています。

(文責：広報委員長 松本 直美)



★会報第74号の誤りに関するお詫びと訂正

7月に印刷物で送付された会報第74号の「支部のキラリ」コーナーで、執筆者とその紹介者である宮城県支部理事長のお名前の取り違えがありました。大変失礼いたしました。お詫びして訂正いたします。

(誤)：渡辺美貴 → (正)：熊谷みち (敬称略)

会報第74号の訂正版は、7月にメルマガで配信されています。学会ホームページにも訂正版が掲載されています。

一般社団法人日本学校教育相談学会 会報

第75号

令和6年10月20日発行

発行 一般社団法人 日本学校教育相談学会
会長 春日井 敏之

編集 一般社団法人 日本学校教育相談学会
広報委員会 委員長 松本 直美

事務局 〒179-0073

東京都練馬区田柄3-11-28

一般社団法人 日本学校教育相談学会事務局

電話/FAX 03-3926-7386

HP <http://www.jascg.info/>